

第9回 武蔵野市第五期基本構想・長期計画策定委員会 議事要録

■日 時 平成23年6月28日（火）午後7時03分～午後9時08分

■場 所 市役所412会議室

■出 席 山本泰委員長、見城武秀副委員長、
小竹佐知子委員、作部径子委員、松本すみ子委員、
会田恒司委員、井上良一委員、前川智之委員
(近藤康子委員、欠席)
事務局（企画政策室長、企画調整課長他）

■傍聴者 7名

1. 開 会

2. 議 事

(1) 基本課題について

・資料1「第三期基本構想・長期計画、第四期基本構想・長期計画の比較」の説明

資料2「全分野に共通する課題と分野別キーワード」の説明

資料3「基本構想・長期計画の各項目の概要（案）と基本課題について」の説明

委員長：縦の分野は第一期から組みかえたらどうかとかいう議論があるが、変更していない。今までの「緑・環境・市民生活」は森羅万象に及んでいるので、「緑・環境」と「文化・市民生活」の2つの分野に仮に分ける構成になっている。どの辺を順番に議論すればいいか。

事務局：討議要綱の課題提起に合わせて議論してほしい。横串を設定してみたが、もう少し違う横串があるのか。最後は全体に連なる大きな基本的な課題に到達したい。

委員長：資料3の「基本課題」というのは最終的に基本構想のほうに出てくるのか。

事務局：どこに書くかはこれからの議論だと思っている。資料1では複数に書き分けていた。

委員長：「施策の体系」はどのように書いてあるのか。

事務局：基本施策と全体を貫く施策は当然関連性があるので、きょうの策定委員会で大きな基本施策の議論が進めば、それを反映した分野につくっていけると思っている。

体系図の書き方は今までどおりの並び順になると思う。おしりのほうにフラグを立てる等、横割りのテーマとの関連性を上手につけていくような形になると思う。

委員長：今までの施策の体系図は組織にも対応している。行政はそれを見て仕事をするが、市民がわかりやすいようなものもついているのか。

事務局：両引きできるような形が理想だろうと思っている。

委員長：資料2で、右側に5つ並んだ箱の2つ目に「情報」と書いてあるが、正しいのか。

事務局：地域リハのようなものを「情報」という言葉で集約している。大きな意味での情報システムである。圏域別でも市の情報が伝わってこないという話があった。討議要綱での課題でいくと、途切れのないサービスというところに収束するイメージである。

委員：「その他」とは上に入り切れなかったものか。

事務局：分野ごとの固有の課題も出てきたので、それは「その他」に入れた。

委員：資料2で、左から2つ目「健康・福祉」の縦列の下から7個目「福祉施設の再編・整備」というキーワードはどこから出てきたのか。

事務局：公共施設のあり方の中には、将来的には再編が必要だという表現で出ている。

委員：施設は人が生活、活動しており、整備はともかく軽々に再編はできない。くぬぎ園ならわかる。

委員長：男女共同参画社会は「文化・市民生活」の下にあるが、大きくいえば一種のテーマとしてのコミュニティである。コミュニティという概念をもっと緩やかにとらえたほうがいい。

委員：ICTには2つのメリットがある。ツールとクリエイティブである。ツールの使い方では、資料2の一番右の箱で、上から2つ目の「情報」はツールの使い方、5番目の「多様な主体との連携・包括ネットワーク化による支援」はIT系も活用しながら新しいクリエイティブティを生み出す方向にも見える。ツールとツール以外の使い方という分け方もある。「情報」という箱は、こういう形がいいのか。

副委員長：箱の位置、一番下の「多様な主体との連携・包括ネットワーク化による支援」と近づけて置いたほうがいい。

委員：インクルードしてもいい。

委員長：地域リハ、心のバリアフリー、ICT、個人情報の適切な管理が一緒になると、地域リハビリテーションというのはちょっと矮小な感じがする。

委員：資料2の一番左上の「課題」は武蔵野市で私たちが積み上げてきた課題の全集約になっているかということと、横に見たとき、最後に箱にちゃんと4つ入るのか、箱は4つでいいのかを議論すればいいということですね。

委員：討議要綱も、方向性について特に反対意見がなければ、そういう方向で集約していくという整理の仕方がある。

委員長：タイトルに方向性がない。

事務局：市民にも議員にも、4つの課題の分け方、テーマ設定については受け入れていただいたが、まだわかりにくい部分もある。

委員：教育をどう扱うかが抜けている。「子ども・教育」でいう教育ではなく、横につなぐ教育はどこに入るのか。

委員長：市民性の涵養みたいなものである。

委員：資料2の「課題」の「生きがい・文化」のところに教育的なこと、市民生活の部分が含まれると思うが、「生きがい・文化」とは違う気がするので、広い意味の教育という箱があったほうがいい。

委員：それが右に来ると「人口構成・世帯構成の変化」になる。おかしい。

委員：教養を深めるための教育と市民性を高めていく教育、2つあってもいいかもしれない。

委員長：それは鶏と卵みたいなもので、地域活動などを通して市民性が養われるというものもある。

事務局：行政が「教育」と書いてしまうと難しい。市民性の教育のような形になるとニュアンスが変わってしまうので、上手に書き込まなければいけない。

委員長：以前の基本構想にはあらゆる分野に環境という視点を入れると書いてあった。

事務局：この図は縦で環境を立てたので、ほかの分野で環境というのは横に刺しにくかったと思う。縦にあって横にあるというのも、どう整理するかというのはある。

副委員長：以前、分野としての環境と、視点や切り口としての環境があり得て、その切り口の環境は横串だという話だった。福祉も同様だという話があった。

事務局：第四期の環境は持続可能性に近かったので、かなり前面に出てきたと思う。この資料2では「持

「持続可能なまちの形成」の中に両方入っている。狭義の環境と財源的な持続可能性。これを2つに割って環境を入れることは可能だとは思いますが、基本原則に入れるか基本課題に入れるかは整理が必要。市民自治は基本原則に入れるべきだ。

委員：「持続可能なまちの形成」は、武蔵野市が夕張市のようにならないようにするという意味もあるのか。

事務局：ある。

委員：「持続可能なまちの形成」として、行政が負担せずに地域で物を解決するためには、コミュニティの養成が必要である。

事務局：ソーシャルキャピタルはまちの持続可能性の大きな要素だと打ち出してはどうかというのが討議要綱の趣旨である。

委員：今後はソーシャルキャピタルが豊かな市をつくるということ。

委員長：課題A、B、C、Dと「健康・福祉」のクロス、あるいは課題Bの「住み続けられるまちの構築」と「健康・福祉」のクロスというふうに書くと、縦で見ても比較的体系性があり、横で見ると一貫性があるものが書けると思う。

委員長：市長はまだ気温を1度下げるということをいっているのか。

事務局：象徴的におっしゃっている。地球環境保全が中心的なテーマだったが、今は原発事故のためにその話はどこかへ行ってしまっている。「自然エネルギー」と書けば簡単だが。

委員長：市長が1度下げるといったことを書くと、大きな命題についての象徴的な提示はできるが、電力消費を減らさずにCO₂を減らすのは無理がある。

委員長：「健康・福祉」で持続可能性というテーマを語るとどうなるか。

委員：コミュニティの再生、地域の福祉力の増進、財政基盤の安定化、地域リハビリテーションなどのシステムづくり。支える側と支えられる側を軽快にスイッチする。障害者も高齢者も支える側に回る。

委員長：世代間でもそうなのか。

委員：そうだ。東日本大震災では、地元の中学生と高校生がボランティアですごい成果を出した。担い手と受け手を固定せず、できるだけ豊かにスイッチができる社会が持続可能だと思う。ヒアリングでも、自分たちにもできることがあるのに求めてくれないという意見が多かった。それを生かせるとよい。

委員：20年ほど前、人と人はお互いに依存しながら何とかやっという相互依存的自立という考え方が出てきた。これは、地域おこしのためのキーワードにもなると思う。

委員：地域リハビリテーションはそれも含むのか。

委員：含む。

委員長：違うことをうまく組み合わせながら、自立を目指しながら、お互い無理はしない。支えることで自分も支えられるような循環をつくることは、すごく大きなテーマである。気にかけるような弱い支え合いと生活保護のような強い支え合いの上手な制度設計が必要である。

委員：セーフティーネットの網目の大きさの問題か。いろいろな重層的なネットが張っており、奈落の底には落ちないように武蔵野市であればよい。それが地域リハビリテーションでもある。

副委員長：「助けて」といえる関係はすごく大事だと思う。

委員長：ハーバードは市民性教育が基本だといっている。自分の弱さを認めたり、それを人に伝えたりするというのが、よき市民性の根本である。それがあると、他者に対する共感も持てる。立派で、お互いに愚痴や不平をいってはいけないような市民性は高度成長期のもので、これからの安定成長期の市民性は、もっと幅の広いものでなければいけない。

副委員長：市民同士で直接苦情をいえるような関係を築き上げていくことが大切である。

委員：「助けて」というサインを出せる居場所づくりが大切である。

委員長：実践の機会をつくり、市民は自信、つながりの尊さ、うまくいく方法等を学ぶべきである。

委員：ボランティアでも、障害者と関わるのが不安といっていた人が、2年ぐらい活動しているとそのまちの担い手になったりする。

事務局：ごみリサイクルや緑化公園等で、行政主導だから壁に当たっているところがある。行政指導のような形からの脱却というのが武蔵野市政の大きな課題だと思っている。

委員長：場をつくろうといっても場はできないということか。

事務局：施策としてできることではない部分が多い。公園の自主管理も含め、行政が市民に球を投げる形だと、行政が抜けたときに活動が継続していかない。市民と行政の関係性が問われている。

委員長：行政にいわれてやるのでは市民性は育たないということか。

事務局：端的にいうとそうかもしれないが、行政の計画の中でどう書くかは非常に難しい。なかなか結論が出ないときに使うのが「市民との協働で」という結論だが、ここ10年、実際の現場では、市民の側も行政の側も何の解決にもなっていなかった部分がある。

委員：市民が自発的にするものでないと本当の意味で効果が根づかない。ただ、何から何まで市民が

やるのは難しい。この前の2回の無作為抽出のワークショップは非常に大きな成果があったが、あれを市民が一からやるのは無理である。その辺の基盤をある程度行政が整えてくれたら、市民が自発的に動ける。今後10年で目指していきたい。

委員長：出番の舞台をつくること。その手法は。

委員：多様な主体によるサービス供給でいいのではないか。

委員長：わかるが、事務局がいていたように、そうしたらそれで終わってしまう。

事務局：一ついえるのは、行政が市民の邪魔をしないことである。例えば一時保育の保育料など、NPOより安くしないことで、市民活動、企業活動を邪魔しないというのは基本的に大きな原則としてあると思う。しかし、市がやっているのだからもっと安くせよというクレームが一時保育でも上がってくる。

副委員長：市がNPOに金を出して、NPOの料金をもっと下げようという発想はないのか。

事務局：それをやり出すと果てがない。それならば、子ども手当あるいは子どもサービスのチケット制のようなものに行き着く。

委員：協働という考え方は、響きはよかったが、市がやるべきことと市民がやるべきことの区分があまりにまざることが多々あった。ハンドブックも出ているが、そのとおりに進まない。

委員長：アメリカ人は、嫌になったら無理してやらない。日本は、頑張っているお母さんに「もうほっておきなさい」といっても絶対にほっておけない。

委員：福祉活動をやっている人は、私1人抜けたらもうアウトというほど追い詰められている。

委員長：時々サボりながらやっていると、あの人に任せておいてはだめだと思ってみんな手を出すようになるが、しっかりやってくれて安心感があると、だんだん人は去っていく。

委員：中心的にきちんとやる人だけが取り残されて、その人たちに過重な負担がかかっている。

委員長：それは国民性か。

委員：そういう立場になったら私も無責任にやめないかもしれない。簡単に手を抜けない状況はある。

委員長：みんなで入れかわり立ちかわりやるのがいい循環であるという話が出たが、入れかわり立ちかわりやる人がいないと、まじめな人が全部背負い込んでいくことになる。

委員：悪循環がずっと働いて、疲弊していく。子どものころからきちんと教育しないと、大人になってから「さあ『ヘルプ』といなさい」というのは無理がある。

事務局：これからの豊かな地域社会とはこういう社会なのだと示すことが今の仕事である。豊かさとは何かという提案を最初のビジョンのところですべきだと思う。

委員長：市民が活動していることについて市側が共有する仕組みや、経験を話してくれるパネルがあると随分違うのではないか。

事務局：ワークショップの話まではいくが、担い手論に入ると突然状況が変わる。

委員長：それは武蔵野プレイスの仕事である。

委員：武蔵野プレイスのようなところに集まって議論するのも大事だが、もっと日常的にそういうことが語られたり、伝承されていくような社会がいいのだろうと思う。

委員：この前の無作為抽出はいい試みだった。市役所に来たときと帰るときでは参加者の顔が全然違った。だが、あれですぐ市民が動くわけではない。もう1つ、2つ仕掛けをしないといけない。

委員：それでも、自分の気持ちのステージは確実に上がったと思う。それを持ち帰り、日々の生活の中でさらに自分が主体となって展開していく場などが必要である。

委員：何かフォローがあってもいいと思う。

委員：それは第三の場所というか、居場所的なところでやりとりするというか。

事務局：半分ぐらいの方は、ふだん話ができないいろんな人と話せたことそのものが居場所だとおっしゃった。非常に楽しかったのだと思う。

委員長：意識と知識を行動にどう結びつけるか。そのジャンプまでが結構ある。

事務局：そこで欲を張ると、余りうまくいかない。研修や講座でそんなに人が変われば苦労しない。そういうものの積み重ねである。

・資料3「基本構想・長期計画の各項目の概要（案）と基本課題について」の追加説明

事務局：「行・財政」を除く5分野にして、「行・財政」を横串にするという考え方もある。

委員長：自治基本条例の話が書いていない。自治体運営の基本的なルールについて行・財政計画には入らなくなってしまうのではないか。

事務局：行・財政という概念そのものを分野としてとらえるかという話である。どちらかといえば、財源の問題も含めて横串でとらえたほうがいいのかという気はする。

委員長：行・財政計画に近いものは、今までも分野とは別に書かれている。第3章は財政計画があって、今、行・財政という分野が両方ある。

事務局：行政の仕組みだと、かかわり方に特化して書いているものがあるので、全部に串として考えてしまうと、例えば行・財政改革等は見えづらくなる気がする。

委員長：「市民生活」という言葉をどう考えるか。例えば買い物の利便性、交通の安全性、自転車対策、インフラも含めてそういう生活環境を、市民生活を大切にしてくれということか。

事務局：圏域別市民会議や関係団体市民会議の中でご発言いただいた方の「市民生活」とは、身の回りの利便性ではなくコミュニティとか地域のあり方ということではないかと私は思った。

委員長：普通の人が市民生活といたら、やはり利便、安全性である。

事務局：ごみ問題、節電といった話。

委員：そういう意味で、前回までは「市民生活」と「緑・環境」は一緒にしていた。

事務局：行政としては、ごみ問題というのは財源的にも非常に比重が高い。

委員長：普通の人イメージする市民生活は、学校、福祉、水の安全等、5つの分野にまたがっている。緑と環境でも、教育でも、福祉でもない市民生活とは何なのか。そんなに重要なら、「コミュニティ」と書いてしまうのはどうか。「地域社会・文化・産業」と書くか。

委員：「地域社会」より「コミュニティ」のほうが受け入れやすいかもしれない。コミュニティの再構築を目指したい。地域を耕していくところから始めないと、これからの地域コミュニティはできないかもしれない。

委員：市民生活とはどういうことか、取り巻くことは何かというと、「子ども・教育」があって、その後にベースとなる行・財政がある。

委員長：逆に、資料2の「文化・市民生活」の下の括弧書きの文化・防災・商工業振興のほうがわかりやすい。

委員長：生涯学習をどう考えるか。市民文化の発展の支援があり、生涯学習の推進があって、これは何かといわれたら、説明しにくい。この際、それを統合するかどうか、こちらに寄せるかどうか。下手をすともめる。

委員：今の姿で向こう10年間いくのは私も違和感を覚える。生涯学習は今のままでいいのか。

委員長：生涯学習は、基本的には市民のエンパワーメントである。

事務局：現実にはさまざまところで生涯学習の事業を展開しているのに、教育委員会の一部署だけの事業をもって社会教育だ、生涯学習だというのはすごく違和感がある。

委員：都市基盤は、ユニバーサルで考えると全部である。今度、個別計画との整合性という話が出てくるときは、1つにまとめるのか、先ほどからいわれているような形でまとめるのか。

委員長：それは武蔵野市が成熟してきたということである。昔は、都市基盤の整備というと道路の舗装、

水道の整備、下水を何とかという1個1個の事業だった。今はそれが一巡した。

事務局：自転車は、都市基盤から市民生活に移る時期かもしれない。ワークショップをやると、自転車問題は福祉でも、教育でも、都市基盤でも必ず出た。施設で見ると基盤で、移動のしやすさ、移動を阻害している要素、いろんな面が出た。市民感覚からいくと、自転車対策は都市基盤というより市民生活とか福祉というイメージだから、自転車そのものを動かしてもおかしくない気がする。

副委員長：文化と産業が横並びになっているのは違和感がある。

委員長：産業というのは起業するとか、ソフトのサービスとか、ITとか、そういうものも含めて。そう考えると、文化と産業はつながっている。

副委員長：寄って立つ原理が違う。片や効率性、片や効率性でははかれないものを求めている。

委員：武蔵野市は、古いものの中で新しいものをつくるという武蔵野文化の中で発達してきた。もしかしたら、新しい産業的なものが生まれて新しい武蔵野市のブランドをつくるかもしれない。

委員長：そういうWay of Life（生活様式、生き方）を掘り起こし、発展させていく。産業みたいな形で結晶することもあるし、コミュニティみたいな形で結晶することもある。そう整理すると美しい。

事務局：武蔵野市は都市観光という看板を掲げたが、余り計画にも書かなかった部門である。

委員長：もっと書くべきである。

事務局：吉祥寺があればブランド力があるのは、生活文化、商業文化そのものの魅力なので、その強みはもう少し出したほうがいいと思う。

委員：観光という考え方が変わって、昔は非日常的な観光を楽しみに行ったが、今は日常生活を見に行くような日常観光になった。武蔵野市は日常観光都市であるから、もっと知らしめれば、人はもっと入ってくると思う。

3. その他

委員長：ほかのまちの基本構想等には、都市の窓を開こうとかいう気のきいたコピーはない。それをどうするか。また、「基本的な考え方」の1から5は策定の基本的な考え方であって、10年の事業の進め方の基本的な考え方は違う。10年の大きな考え方は、自立と支え合い、支え合いと

自立のマネジメントである。それは個人から地域社会、小さなコミュニティから武蔵野市まで同じテーマで語れる。それは10年間のテーマとしてよろしいと思う。また、セーフティーネットや多様性を認めながら、それぞれの人に出番があり、居場所がある。その辺の盛りつけを考えておいてほしい。その辺はいずれ僕が文章にして書くつもりだが。

各委員がそれぞれの担当分野の文章を100字から200字で書いてくることになった。7月5日の昼が締め切りとなった。

——— 了 ———